

学生たちの取り組み

市内にある兵庫県立国際高等学校では、生徒たちがクラブ活動等を通して平和について知識を深め、実際に交流・活動をしています。今回は2つのグループを紹介します。

ガザ地区は過去に何度も軍事侵攻を受け、1年前にも大規模な空爆を受け多くの命が奪われました。人や物の出入りが厳しく制限されたことにより人々は国連や支援団体からの援助物資などで命をつないできました。

1

国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)が運営するガザ地区の学校の子どもたちとの平和交流が行われました。参加者の小田垣さん・竹中さん・谷垣さん・竹内教諭のお話を聞きました。

今回の交流に至った経緯や交流に参加したきっかけは何ですか

竹内教諭 さまざまな国とオンライン交流をされている先生の協力を得て、オンラインだからこそ交流ができる地域を探していたところパレスチナのガザ地区が候補として挙がってきました。

小田垣 以前にドイツやフィンランドとの交流をしたことがあったのですが、その時は、文化・流行に興味があり参加しました。今回はパレスチナ問題を知るなかで、どのような暮らしをしているのかが興味があり、歴史的背景や現在の国際情勢を意識したものでしたので参加しました。



交流して気づいたことはありますか

竹中 ガザ地区の人たちの生活について知らなかったもので、閉鎖的な空間で生活している印象がありました。交流をした時、日本のアニメに興味をもっている生徒がいて「ワンピース」や「進撃の巨人」の話で盛り上がりました。YouTubeやインスタグラムなどもしており、宗教・文化・言語の違いはあっても、日本で暮らす私たちと変わらない暮らしをしている部分もあるんだと思いました。しかし、ガザ

地区の人たちは常に命が危険にさらされている状況であることをしっかりと理解しておかなければならないと思いました。

今回の交流をきっかけに皆さんは平和についてどのように考えていますか

谷垣 平和について調べたときに、辞書では「争いのない状態」と記載されていました。もちろん「争いのない状態」も平和だと思いますが、それだけでなく、人が身体的にも精神的にも傷つかず、幸せに暮らせる状態が平和ではないかと思います。



竹中 戦争がなくても、差別や暴力があれば、一人ひとりが生きづらさを感じていけば、平和とは言えないと思うので、「あたりまえ」とされている価値観や状況でも違和感を感じることができる環境になっていけば平和な状態に近づいていくのではないかと思います。



2

ロシアによるウクライナへの軍事進攻で犠牲になっている多くの人たちを支援するため、国際高等学校のJRC(青少年赤十字)部員や有志の生徒がウクライナ人道危機支援街頭募金活動を行いました。募金活動に参加された高田さん、園田さん、高重さん、安藤教諭からお話を聞きました。

支援活動の中心となったJRC部は、どのような活動をしているのですか。今回の支援に至ったきっかけは?

安藤教諭 新型コロナウイルス感染拡大前は東日本大震災の被災地へのスタディツアーや国際問題を勉強し、街頭募金活動を中心に行っていました。他には、貧しくて学校に行けないケニアの高校生たちの奨学金支援を行っています。今回の活動のきっかけは、ニュースなどでロシアによるウクライナ侵攻を見て、部員から街頭募金をしたいという提案を受けたことです。

実際に募金活動をして、感じたことはありますか

高重 たくさんの方が募金をしてくださり「頑張ってるね」という声だけでなく、「戦争がなくなりますように」と手を合わせて募金をされた人もおられました。募金活動を通して離れていてもできることがあるんだということ。そして、多くの人が戦争がなくなってほしいという気持ちを持っているのだということに気付くことができました。



街頭募金活動に参加されたきっかけは?

高田 ウクライナのことについてあまり知りませんでしたが、今回のウクライナ侵攻に関するニュースでリモート中継されていた時、私たちと同じくらいの子どもたちが苦しんでいる姿を見て、見過ごすことができませんでした。授業でも避難民について調べた時に、ウクライナの人が避難民として日本へ来るニュースを見て何か役に立つことができないかと思い、参加することを決めました。

皆さんは平和についてどのように考えていますか

園田 軍事侵攻を止めることや平和になるためには、世界が一つになって行動することが大切だと思います。私は、今回学んだことを同級生や身近な人たちに伝えていきたいです。

全員 今後もこのような活動に参加してみたいと思います。今回の募金活動にご協力いただいた地域の皆さんに心より感謝申し上げます。



たゆまぬ平和への歩み展

軍国主義全盛の戦時下、小学生・中学生時代を芦屋で過ごし、戦争を体験された高瀬さんのご家族から戦争資料を多数寄贈いただき展示をしています。

～高瀬さんのコメント～

「遅かれ早かれ、我々もやられて死ぬ。」それが当たり前でしたから、悲壮な気持ちはありませんでした。「死」というものに感覚が麻痺していました。それだけ、当時の教育とは恐ろしいものでした。

■期間 8月31日(水)まで

■場所 市役所北館1階展示コーナー

